

一朝の礼拝から 1—

「手を放して神に任せる」

マルコによる福音書 12 章 30 節

アルコール依存症と診断されて 20 余年、当初はアルコールの摂取をやめればすべて解決、1 年もすれば薔薇色の未来が拓けると思っておりました。しかし、色々な自助グループに通っているうちに、アルコールを断つのは実はスタート地点でしかない気付かされました。

様々な自助グループで使っている 12 ステッププログラムというものがあります。これは AA (Alcoholic Anonymous) というアルコール依存症者たちの実践のステップとして使われて初め、今やそれ以外の様々な問題 (薬物・ギャンブル・摂食・恋愛・ゲーム・共依存・被虐待のトラウマを抱えた人たち) を抱える人達のために使われています。その 12 ステップを実践していくためには、まず自分の無力を認めることから始めなければなりません。そして、回復の過程でアルコールに対して無力なだけでなく、すべてのものに対して無力であるということも認めることが必要となってきます。自分の無力を認めてしまったら、なにを頼りに生きればいいのか。そこで神の出番が待っています。そして、さらに自分の意思だけではどうしようもない状況に追い込まれていることを認め、降伏して神に任せることが要求されるのです。

多分、一般社会では自分の努力 (意思・考え) で、人より秀でた人になることが称賛され、それは自分が必死に努力した結果だとされているのではないのでしょうか。しかし、そのために、本来、受け取れるはずの神の賜物を沢山見過ごしているような気がしてなりません。必死になってしがみついているものが何かを自分で気づき、手を放してみることはないかと思えます。手を放すというは諦めるということではありません。自分がしがみついているものを手から放して成り行きに任せるということだと思っています。そうすると必要なものはまた自分の元に戻ってくるし、不必要なものは離れていきます。

それまでの生き方、「こうでなければならぬ」「こういうことはやってはいけない」という自分ルールから自由になり、神の意思に任せることが生き易さへと繋がっていくと信じております、

マタイ 6 章 34 節、「明日のことを思い煩うな。明日のことは、明日自身が思い煩うであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」

安川 徹 (音楽学科)

一朝の礼拝から 2—

「裁くことの愚かさ」

ルカによる福音書 6 章 37～38 節

神様は、他人を自分のきめつけで判断するなということをお私たちに伝えてくれます。

国際文化学部の富永先生と話す機会があり、留学生のことを知る機会がありました。対留学生というと、どうしても日本人と距離を感じてしまいがちです。事務室に訪れる留学生たちは、日本語の運用能力も様々です。

先生との話は次のようなものでした。私たちが留学生と接する際、日本人と違うという線を引いてしまうものですが、結局は同じ人間です。出身地が違うだけの活水生として接してくださいと言われたのです。その言葉を聞いて、私が今まで「留学生だから日本語がわからないのは当然で、ある程度配慮してあげなければならない。文化も違うのだから、日本のことが理解できないだろう。」と思っていたことは、自分自身のものさしで勝手に判断していたことだということに気づいたのです。先生と話しをした後、聖書の「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。」という言葉思い出したのです。

留学生というラベルをつけていますが、年齢的には大学生であり、物事の判断は自分でできるので、ただ使う言葉が違っているだけなのです。

自分で勝手に留学生は〇〇だからという観点で判断していたことの愚かさに改めて気づかされました。人と人とのやりとりということをお忘れ、日本人と留学生という視点になってしまっていたのです。

普段のやり取りの中で、あの人に話しても無駄だから、あの人には理解してくれない等、自分勝手に判断してしまうことは多くあります。相手が理解していないのか、それとも理解できない理由があるのかという視点を持つことが必要なのかもしれません。本学は、そもそも創立者がラッセル先生という外国人宣教師であり、国際的・多文化的な学校であるはずなのです。

人を自分のものさしだけで判断せず、相手を受け入れる心を持つように。人は自分だけで生きているのではないのです。人が他の誰かと支えあって生きてくることが、神様の望むことなのです。

中野忠彦 (教務課)